

中世片仮名文における字音語の拗音表記について

国語学教室 榎 木 久 薫

1 はじめに

院政・鎌倉時代の片仮名文献は、漢字と片仮名の交え方の相違によって、二類に大別することが提唱されている⁽¹⁾。漢字表記が中心で片仮名表記は助詞・助動詞・送り仮名の類であるものを片仮名交り文、片仮名表記が中心で若干の漢字表記を交えるものを漢字交り片仮名文として区別するものである。

この二類の片仮名文を、語（自立語）の表記という観点から見ると、片仮名交り文では、語の表記は原則として漢字表記とすることができる。一方、漢字交り片仮名文では、漢字表記されている語は字音語が中心であり、それに若干の和語が加わるものである。

このような漢字交り片仮名文では字音語は多く漢字表記されるが、片仮名表記された例も見られる。筆者は先攻⁽²⁾において、次の3文献に見られる片仮名表記字音語について、語彙的性格の面から、なぜこれらの語が片仮名表記されたかについて考察を加えた。

『法華百座聞書抄』（『法華修法一百座聞書抄』勉誠社文庫・『法華百座聞書抄総索引』小林芳規編）

天仁3年（1110）法華経をある内親王の発願により、一百座にわたって開講演説した法談を筆記したもの。現存の法隆寺本は平仮名文のより大きな原本を漢字交り片仮名文で抄出したものと推定され、院政末期の書写とされる。

『凶書寮本宝物集』（『宝物集』古典保存会）

平康頼が鬼界が島から治承3年（1179）帰洛後、数年の間に撰述されたものと考えられる。凶書寮本は平康頼自筆と伝えられるが、鎌倉初期の書写と考えられる。

『観智院本三宝絵詞』（『三宝絵詞上・下』勉誠社文庫・『三宝絵詞自立語索引』馬淵和夫監修 中央大学国語研究会編）

源為憲の撰述。序によれば永観2年（984）尊子内親王に奉られた。観智院本は巻下に文永10年（1273）書写の奥書がある。巻上は片仮名交り文・巻中下は漢字交り片仮名文の表記様式である。（なお、本資料においては、片仮名表記字音語の例はすべて巻中・下から見出された）

先攻では、これら3文献に見られる片仮名表記字音語について、次の平安中・後期和文5文献の語彙との比較を行った。

蜻蛉日記（『かげろふ日記総索引』佐伯梅友・伊牟田経久）

枕草子（『枕草子総索引』榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美）

源氏物語（『源氏物語大成索引篇』池田亀鑑）

紫式部日記（『紫式部日記用語索引』東京教育大学中古文学研究会）

更級日記（『更級日記総索引』東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾）

その結果、これら3文献に見られる片仮名表記字音語の内、普通名詞類⁽³⁾に和文文献との共通語彙の多いことが分かった。各文献における片仮名表記字音語中の固有名詞⁽⁴⁾と普通名詞類の用例数、および普通名詞類中の和文共通語の用例数を示したものが表1・2である。

〈表1〉

		用例数
法華百座	固有名詞	81 (61.4%)
	普通名詞類	51 (38.6%)
宝物集	固有名詞	11 (29.7%)
	普通名詞類	26 (70.3%)
三宝絵詞	固有名詞	9 (25.7%)
	普通名詞類	26 (74.3%)

〈表2〉

		用例数
法華百座	和文共通語	28 (54.9%)
	普通名詞類	51
宝物集	和文共通語	15 (57.7%)
	普通名詞類	26
三宝絵詞	和文共通語	18 (69.2%)
	普通名詞類	26

このことから、普通名詞類においては、片仮名表記されている語の多くが日常の言語表現において用いられた語⁽⁵⁾であって、これらの語は漢字の表意機能を必要とせず、語形が示されるのみで（つまり片仮名表記されるのみで）語として理解され得たであろうことが推定される。一方、固有名詞においては、品詞の性格上漢字の表意性が語の理解に対して機能しないと考えられる。

このことは、実際の書記に際して、普通名詞類においては、その多くを占める、日常の言語表現において用いられる語は、字音語との認識が明瞭に持たれなかったために片仮名表記されやすく、また固有名詞同様、語の理解において漢字の表意機能を必要としないために、片仮名表記が許容されやすかったものと考えられる。一方、固有名詞においては、語が内包としての意味を持たないため、漢字表記を知識として記憶していなければ、語の意味から漢字表記を類推できないために片仮名表記されやすく、また漢字の表意性が語の理解に対して機能しないため、意図的にも片仮名表記が許容されやすい。

更に、普通名詞類において、右のような性格の語が片仮名表記されていることから、本放で取り上げた漢字交り片仮名文資料3文献の書記者は、字音語は漢字表記・和語は片仮名表記という表記規則に原則として従いながら、これらの文献を書記したものと考えられる。つまり、日常の言語表現において用いられる字音語の片仮名表記が出現する背景には、字音語は漢字表記・和語は片仮名表記という漢字交り片仮名文の表記様式があるということが出来よう。

2 振り仮名付き字音語の語彙的性格

高羽五郎氏は、その御論攷⁽⁶⁾において、『法華百座聞書抄』『図書寮本宝物集』の片仮名表記字音語における拗音表記の有無を振り仮名付き字音語と比較して、本文の片仮名表記と漢字に対する振り仮名表記とで拗音表記が異なると述べておられる。高羽氏は、本文の片仮名表記に拗音表記が見られないか極少数例しかなく、漢字に対する振り仮名表記に拗音表記が多く見られることなどを手掛りとして、これらの文献の本文の表記は中古和文の表記を踏襲したものであると述べておられるのである。しかし、既に先攷で述べたように、『法華百座聞書抄』『図書寮本宝物集』『観智院本三宝絵詞』の片仮名表記字音語には、普通名詞類において語彙的な偏りが見られる。振り仮名付き字音語においても、同様の偏りが見られるのでなければ、片仮名表記字音語に拗音表記が見られないことが、表記の異なりと言えない可能性があると考えられる。

そこで、三文献に見られる振り仮名付き字音語について、片仮名表記字音語と同様に、固有名詞と普通名詞類とに類別し、平安中・後期和文5文献の語彙との比較を行った。なお、語の検索に当っては、漢語サ変動詞と名詞とを区別しなかった。また、複合語の下位要素であっても意味的に独立性が高いと考えられるものは取り上げた。

	蜻枕源紫更	賞 ^{シヤウ}	
	蛉 ^シ 氏 ^シ 級 ^シ	ウ168	×××××
『法華百座聞書抄』		震動 ^シ ウ026	×○×××
【固有名詞】		先 ^{セン} 孝 ^{カウ} 聖 ^{シヤウ} 朝 ^{チヤウ} ウ012	×××××
阿育王 ^{イク} ウ200		桃李 ^{タウリ} ウ342	×××××
温州 ^{ウン} ウ232		安置 ^チ ウ201	×××××
鵝王 ^{カワフ} ウ155		不注 ^{チウ} オ423	×××××
善友太子 ^{センウ} ウ135		楊(儉) ^{チウ} 盜 ^{タウ} オ315	×××××
芙蓉 ^{フヨウ} ウ343		銅柱鉄裾 ^{チウ} ウ291	×××××
平州 ^{ヘイ} オ142		勅 ^{チヨク} ウ003	××○×○
楊 ^{ヤウ} マウ オ495		勅 ^{チヨク} ウ203	××○×○
為 ^{レウ} 陵 ^{リョウ} オ008		佛 ^{フツ} 勅 ^チ ウ049	○○○○○
【普通名詞類】		三途 ^ツ ウ286	×××××
旱 ^{カン} 秣 ^{マク} (魃) ^{ハツ} ウ101		屠者 ^ト オ052	×××××
祈 ^キ 念 ^{ネン} ウ415		等 ^{トウ} ウ224	×××××
利益 ^{リキ} ウ220		男 ^{ナム} 官 ^{クワン} オ422	×××××
行住坐臥 ^{クワ} オ327		男 ^{ナム} 官 ^{クワン} ウ219	×××××
芒 ^{マウ} 涼 ^{リョウ} ウ047		日食 ^{ニツキ} ウ237	×××××
□□ ^{クワウリヤウ} 国 ^{クニ} ウ411		懷任(妊) ^ニ ウ412	×××××
産 ^{サン} 生 ^{セイ} ウ414		身体髮 ^フ ウ022	×××××
女 ^メ 識 ^{シキ} オ422 ウ219		百練 ^{ハクセン} オ367	×××××
疾 ^{シツヤク} 疫 ^{エキ} ウ411		頗 ^ハ 梨 ^リ オ162	×××××
駟 ^シ 馬 ^バ ウ301		父 ^フ 母 ^ボ オ022	×××××
		亡 ^{マウ} 相 ^{ソウ} 天 ^{テン} 道 ^{ドウ} オ252	×××××
		鬼 ^ミ 魅 ^{メイ} 魍 ^{ワウ} 魎 ^{リョウ} ウ278	×××××

地涌 <small>ユ</small> ウ041	×××××	遣長 <small>ケン</small> 723	×××××
楽 <small>ラク</small> オ444	×××××	【普通名詞類】	
楽 <small>ラク</small> ウ118	×××××	交雜 <small>ケウサワ</small> 168	××○××
乱 <small>ラン</small> ウ014	×××××	枯乾 <small>コ</small> 206	×××××
樓 <small>ロウ</small> オ220	×××××	蟒身 <small>マウ</small> 228	×××××
雍(擁)護 <small>ヲ</small> ウ227	×××××	不例 <small>レイ</small> 336	○○○○○
恩 <small>オン</small> ウ141	××○××	清遙 <small>セイユウ</small> 349	××○××
『図書寮本宝物集』		能(衛)府 <small>フ</small> 410	○○○××
【固有名詞】		胡角 <small>カク</small> 421	×××××
郭巨(臣) 045	×××××	釋種 <small>シヤクシュ</small> 437	×××××
蒙求 046	×××××	繼母 <small>ケイ</small> 520	×××××
韋提希夫人 086	×××××	早魃 <small>カンハツ</small> 558	×××××
史師明 102	×××××	乳 <small>ゴウ</small> 642	×××××
北嶺 115	×××××	賞 <small>シヤ</small> 828	×××××
紫金山 118	×××××	緑林 <small>リョク</small> 875	×××××
宣婆城 233	×××××	『観智院本三宝絵詞』	
光榮 275	×××××	【固有名詞】	
匡衡 300	×××××	巨鯛女 <small>ヲホタイニヨ</small> 中02オ1題 中33ウ6地	×××××
道隆(澄) 303	×××××	靄禪師 <small>アイ</small> 中03ウ5地	×××××
室(定)子 307	×××××	金剛山寺 <small>サムシ</small> 下30オ6地	×××××
伊尹 343	×××××	宇陀羨王 <small>セム</small> 上02ウ8地	×××××
呉王 437	×××××	奈女 <small>ナ</small> 下12ウ6詞	×××××
項(頃)羽 438	×××××	風行天 <small>フキヤウ</small> 下60ウ1詞	×××××
孝徳天皇 440	×××××	維衛仏 <small>エイ</small> 下15オ7詞	×××××
南易 471	×××××	【普通名詞類】	
伊尹 491	×××××	干薑 <small>カンカウ</small> 下60オ2地	×××××
舉賢 493	×××××	窟 <small>クツ</small> 下27ウ3話	×××××
周 527	×××××	画讚 <small>クワ</small> 下73ウ1地	×××××
佰夷 527	×××××	棺 <small>クワン</small> 中14ウ4地	×××××
叔齊 527	×××××	藻豆 <small>サク</small> 下13オ5詞	×××××
顔淵 531	×××××	看花示位 <small>シ</small> 下66オ1地	×××××
堯 557	×××××	仙靈 <small>セムレイ</small> 下27ウ3話	×××××
陽 557	×××××	地 <small>チ</small> 下27ウ3話	×○○×○
毛血律師 567	×××××	帝姫 <small>テイヒメ</small> 中37ウ5地	×○○○×
皇奘石 581	×××××	伏蔵 <small>フクサウ</small> 下27ウ3話	×××××
公信 717	×××××	盪 <small>リヤウツウ</small> 応面 下73オ6地	×××××

固有名詞・普通名詞類ともに、平安中・後期和文5文献に見られる語が極少ないことが分かる。片仮名表記字音語と同様に用例数を数値として示したものが表3・4である。

〈表3〉

		用例数
法華百座	固有名詞	8 (16.3%)
	普通名詞類	41 (83.7%)
宝物集	固有名詞	28 (68.3%)
	普通名詞類	13 (31.7%)
三宝絵詞	固有名詞	7 (38.9%)
	普通名詞類	11 (61.1%)

〈表4〉

		用例数
法華百座	和文共通語	6 (14.6%)
	普通名詞類	41
宝物集	和文共通語	4 (30.8%)
	普通名詞類	13
三宝絵詞	和文共通語	2 (18.2%)
	普通名詞類	11

このことから、まず普通名詞類の語彙的性格は、日常の言語表現に用いられることの少ないものということが考えられる。漢字表記の語に振り仮名が附される理由は幾つか考えられるが、大きな理由の一つとしてその語が未知のものであって、どのように音声化するか不明である場合が考えられる。このように見ると、普通名詞類については、片仮名表記字音語と振り仮名付き字音語とは語彙的性格が日常の言語表現に用いられる語と、日常の言語表現に用いられることの少ない語という相対立する性格を持っていると言えることが出来る。

一方、固有名詞については、普通名詞類と同様の観点から、語彙的性格が同じかどうかは明らかに出来ない。片仮名表記字音語・振り仮名付き字音語共に平安中・後期和文5文献との共通語彙は無いがあっても極少数であるが、時代とジャンルとを異にすれば、用いられる固有名詞が大きく異なることが考えられ、共通語彙の有無をもって、日常の言語表現において用いられた語であったかどうかは判断し難い。しかし、多くの語は日本以外の人名や地名などであるから、字音語として認識されたであろう。

3 拗音表記の分布

3文献の片仮名表記字音語・振り仮名付き字音語中に見られる拗音表記を含む語は次の通りである(『法華百座聞書抄』には、漢字の右傍ではなく、右下に片仮名小字表記によって字音が記された例がある。これは、右傍の振り仮名とは、書写の過程が異なる可能性があるが、同一の語に右傍の振り仮名と右下の片仮名小字表記とが見られ、拗音表記についても差異が見出されないので、一括して扱った)。なお、頭子音のない形および直音表記形は全体に亘ってみられる。

『法華百座聞書抄』

【振り仮名付き字音語】

〈普通名詞類〉

芒涼 ウ047

賞^{シヤウ} ウ168
先孝聖朝 ウ012
勅^{チヨク} ウ003
勅^{チヨク} ウ203

センカウシヤウチヤウ
先孝聖朝 ウ012

行住坐臥 オ327

マツウリヤウ
芒涼 ウ047

ナム官クワン オ422

ナムクワン
男官 ウ219

『図書寮本宝物集』

【片仮名表記字音語】

〈固有名詞〉

孟シヤウ君（嘗） 278

カウリヨ（闔閭） 437

〈普通名詞類〉

ハムシヤウ（繁盛） 736

チヤク（嫡） 548

【振り仮名付き字音語】

〈固有名詞〉

ドウチヨウ
道隆（澄） 303

クキヤウ
項（頃）羽 438

クキヤウカウ
匡衡 300

キヨ
擧賢 493

クワクシン
郭巨(臣) 045

モウクエツ
毛血律師 567

〈普通名詞類〉

シヤクシユ
釋種 437

シヤ
賞 828

リヨク
緑林 875

シヤクシユ
釋種 437

『観智院本三宝絵詞』

【振り仮名付き字音語】

〈固有名詞〉

フキヤウ
風行天 下60ウ1詞

フホタイニヨ
巨鯛女 中02オ1題 中33ウ6地

〈普通名詞類〉

リヨウツウ
靈応面 下73オ6地

クワン
棺 中14ウ4地

クワ
画讃 下73ウ1地

これらの用例が、3文献の片仮名表記字音語・振り仮名付き字音語の固有名詞・普通名詞類中どのように分布しているかを次に見たい。表中分母部分が固有名詞・普通名詞類の用例数、分子部分が拗音表記を含む語の用例数である。なお、1語中に拗音表記が2カ所ある場合には2例と看做した。

〈表5〉

		片仮名表記 字音語	振り仮名付き 字音語
法華百座	固有名詞	$\frac{0}{81}$	$\frac{0}{8}$
	普通名詞類	$\frac{0}{51}$	$\frac{10}{41}$
宝物集	固有名詞	$\frac{2}{11}$	$\frac{6}{28}$
	普通名詞類	$\frac{2}{26}$	$\frac{4}{13}$
三宝絵詞	固有名詞	$\frac{0}{9}$	$\frac{3}{7}$
	普通名詞類	$\frac{0}{26}$	$\frac{3}{11}$

表5より、振り仮名付き字音語では、拗音表記を含む語は『法華百座聞書抄』固有名詞に見られない他は、全てに見られる。片仮名表記字音語では、『図書寮本宝物集』普通名詞類に2例・固有名詞に2例見られるのみである。

4 分布の偏りの理由

このような拗音表記を含む語の分布の偏りの理由については次のような可能性が考えられる。

先に述べたように、普通名詞類における片仮名表記字音語と振り仮名付き字音語の語彙的性格の違いによるという可能性である。普通名詞類においては、片仮名表記字音語は日常の言語表現において用いられる語、振り仮名付き字音語は日常の言語表現に用いられることの少ない語という語彙的性格の違いが見られる。

この内、日常の言語表現において用いられる語が片仮名表記される理由は、字音語意識の不明瞭化にあると考えられる。漢字交り片仮名文の表記は、和語は片仮名表記中心、字音語は漢字表記中心であって、字音語の片仮名表記は例外的なものである。このような理由で字音語が片仮名表記されるとするならば、拗音表記を含む語は片仮名表記されにくいということになる。つまり、この時期には和語に拗音節を含む語はなかったと考えられる（口頭語において音韻変化の結果存在したかもしれないが、この時代書記上には現われ難い）。このことから、拗音節を含めば字音語として意識され、片仮名表記されないことになるであろう。

勿論、全ての片仮名表記字音語がこのような理由によるものであるとすることは出来ない。その意味では、『図書寮本宝物集』に2例見られる拗音表記を含む字音語の片仮名表記例は、漢字表記が思い付かないことによる当座の表記というような事情が考えられる。

一方、固有名詞については、先述したような理由で、日常の言語表現に用いられた語であったかどうかは判断し難い。ただ、多くの語は日本以外の人名や地名などであるから、字音語として認識されたであろう。そのような観点から見れば、片仮名表記字音語の固有名詞における拗音表記語の有無が問題となるであろう。

しかし、『図書寮本宝物集』『観智院本三宝絵詞』では片仮名表記字音語・固有名詞の用例数は10例前後であって、拗音表記の有無が有意の理由によるのではなく、偶然の偏りであることも考えられる。このことは、『法華百座聞書抄』振り仮名付き字音語・固有名詞7例中に拗音表記が見られないことから考えられる。

以上のことから、固有名詞・普通名詞類を合わせた用例全体として、『図書寮本宝物集』『観智院本三宝絵詞』において振り仮名表記字音語に拗音表記例が多く、片仮名表記字音語に拗音表記例が少ないか無いのは、『図書寮本宝物集』『観智院本三宝絵詞』とも片仮名表記字音語用例中に普通名詞類の用例が多く、片仮名表記字音語の普通名詞類は、語彙的な偏りから拗音表記が出現しにくいからであるという可能性が考えられるのである。

但し、『法華百座聞書抄』では、片仮名表記字音語の用例中、固有名詞の用例数が多いにも拘らず拗音表記が見られない。このことから、『法華百座聞書抄』を『図書寮本宝物集』『観智院本三宝絵詞』と区別すべき可能性が考えられる。つまり、『法華百座聞書抄』については、高羽氏が述べておられるように、本文の表記が中古和文の表記を踏襲しているという可能性である。このことは、『法華百座聞書抄』の書写時期が3文献中もっとも古いこと、平仮名文からの書き換えが想定されていることなどからも首肯されるところである。

5 まとめ

以上の考察より、平仮名文からの書き換えの可能性を指摘されている文献を除くと、院政・鎌倉期の漢字交り片仮名文において、片仮名表記字音語に拗音表記を含む語が見られない理由を、和文の表記の踏襲とすることには疑問の余地のあることが明らかになった。無論、本放は高羽氏の主張を全面的に否定するものではない。しかし、字音語の表記に関しては、仮名表記を基本とする中古の和文と、漢字表記を基本とする中世の漢字交り片仮名文とでは、本質的な差異があると考えた方が良いように思われる。

また本放は、各類の用例に共通した語彙的性格を見出し、類相互にそれを対比することによって、ある音韻に関する表記形式の差異の理由を考えようとしたものである。よって、個々の用例がなぜそのような表記形式を採っているのかについての個別の検討は別にする必要がある。

注

- (1) 小林芳規博士「中世片仮名文の国語史的研究」広島大学文学部紀要 特輯号3 1971年3月
- (2) 「中世片仮名文における片仮名表記字音語について」鎌倉時代語研究 第16輯 平成5年5月
- (3) 普通名詞類は、用例中、固有名詞以外の語を一括したものである。普通名詞類という名称は便宜的なものであって、品詞としては名詞以外のものも含まれる。一方、固有名詞とは次のような性格を持つ語とした。「普通名詞は同種の事物を一般的に表わす。一方、固有名詞はその同種の事物の内個々のそれぞれの事物を他と区別して表わす。普通名詞が事物の属性を表わすのに対して、固有名詞は事物の属性そのものを表わさず、その事物を単に指示する。つまり、固有名詞は内包としての意味を持たない」(鏡味明克氏「固有名詞」『講座日本語の語彙』第1巻 語彙原論)
- (4) 固有名詞とは注(3)で述べたような性格を持つ語とした。
- (5) 築島裕博士に次のような指摘がある。「一般に仮名文学に出て来る漢語は、その性格が訓点資料のそれとは異つて、実際に作者の脳裏にあり、社会一般で使用されてゐた、所謂「表現語彙」であつたと見ることができる」(『平安時代語新論』第三編本論 第四章語彙 第四節漢語の諸問題) 勿論、「表現語彙」といっても、個々の語の性格は一樣ではなく、また作品毎にその範囲も異なるであろうが、和文語に見られる字音語の語彙的な性格として一般化できるのは、当時の貴族社会において、日常の言語表現に用いられた語彙ということであろう。
- (6) 「拗音について片仮名交り文、特に本文と傍訓の表記の違いから知り得る事——漢字音考察の一b——」(国語と国文学 第38巻第8・9号 昭和36年8・9月)

(1993年4月20日受理)